

日中社会学会第 35 回大会

# シンポジウム要旨集

日 時：2023年6月3日（土）・4日（日）

会 場：名古屋大学

## シンポジウム I（開催校シンポジウム）

### 中国・大衆文化・メディアにかんする研究視点と方法への試論

坂部晶子（名古屋大学）

このシンポジウムを企画するにあたって出発点となったのは、漫画『フィチンさん』との出会いとそれについてここで登壇者としても来席していただいた上田貴子先生たちとの対談である。わたしは50年過ぎの人生の大半を漫画など大衆文化の影響下で過ごしてきたが、それを対象化させることはとくになかった。「満洲」の哈爾浜で育った作者、上田としこが中国人の少女を題材に描いた『フィチンさん』を読み解く議論にはそうした体験を言語化することの面白みがあるように思われたのである。

日本と中国のあいだには政治、経済、文化的なかわりもとよりもっと低俗で大衆的な分野でのかわりも大きい。さらに歴史的なつながりも長期的である。大衆文化をめぐる議論としても、西遊記や三国志などの有名作品や、包青天の故事などの古典文学や文化にもとづく研究から、近現代における植民化や日本アニメの文化的侵略を含めた文化帝国主義論まで多様にあると考えられる。近年では、（日中間に限らず）ソフトパワーとしての映画やドラマ、大衆文化の影響力が議論されることも多い。ただそれにもかかわらず、中国にかんする社会学の領域で、「低級文化」としての漫画や大衆文化そのものが題材にあがることはあまり多くはなかったではないか。

本シンポジウムでは、中国近現代史の専門家、日本のメディア・大衆文化の研究者、中国での日本思想史とメディアの研究者の方々に、「中国・大衆文化・メディアにかんする研究視点と方法」について、それぞれの領域から自由にその蓄積や問題点、さらに可能性について議論していただき、この分野の初発的な議論の出発点としてみたい。

## 【第一報告要旨】

### 中国における日本漫画の受容および伝播 —中国マンガアプリケーションを例にとって—

祝力新（中国伝媒大学外国語言文化学院准教授）

1980年代から、日本漫画が世界に広まり始め、さらに中国市場に進出した。中国はもともと日本漫画の影響を受けたアジア諸国の一国として、日本漫画の愛読者が大勢いる。

中国の漫画読者は幼い頃から質の高い日本漫画と接してきた。日本漫画は中国漫画に多くの漫画読者を育ててくれた。前世紀末から今世紀にかけて、インターネットとメディアの発展につれて、中国漫画読者の年齢推移にともない、中国における漫画読者の年齢層は幅広くなってきた。

青年サブカルに浸透されながら成長してきた中国の「Z世代」は、小さい頃から日本やアメリカの漫画を愛読して育った。「Z世代」の彼らはネット文化と共に成長し、大人になっても漫画やアニメやその周辺商品などに対する消費習慣が残っている。

1980年代に、日本漫画は主に海賊版で中国国内で広く普及されていた。当時、中国国内に流通していた日本漫画は億冊も超え、中国漫画市場の九割以上をシェアしたと言われている。その後、中国政府は海外漫画作品の海賊版に手を打ち、海外漫画作品の中国販売を制限し始めた。

2000年以降、日本漫画の中国出版は再び回復されている様子が見られる。中国では「漢化組」と呼ばれる民間同人組織が現れ、日本漫画を愛する人々がインターネットを通じて集まり、日本で出版された長編漫画の一部をスキャン・翻訳・修正し、日本語の分からない中国人読者たちに翻訳された日本漫画を伝播した。

現在、中国の漫画読者には漫画アプリのオンライン登録ユーザーが主流となっている。2022年12月に、中国の「トップ3」漫画アプリ（「快看APP」「Tencentアニメ漫画APP」「ビリビリ漫画APP」）のオンライン登録ユーザー人数は6億5000万人を超えている。この三つのアプリにおける2022年12月のユーザー月間活躍数(MAU:Monthly Active User)は合計7000万人を超えた。その中で、「ビリビリ漫画アプリ」は日本から購入した漫画著作権版がもっとも多く、中国における日本漫画愛読者の最大活躍陣地となっている。

日中両国の間に、言うまでもなく歴史の源で文化の接近性があり、それと同時に文化の差異性もある。その文化的な接近性があるからこそ、中国の読者は日本漫画の内容・ストーリー・人物設定などに共感を喚起しやすく、日本漫画を受け入れやすい傾向も多く見られる。一方、日中両国の文化は一定の共通性を持った上で、同時にさまざまな差異も存在している。それで、文化の差異もまた中国人読者に異種文化への憧れを生み出せ、より積極的な態度で日本の漫画を受け入れるようにする。文化の接近性と差異性は、中国における日本漫画の受容と伝播の基礎となっている。

## 【第二報告要旨】

### 好戦的サブカルチャー消費にみる日本人の戦争観——日独決戦ブームからの変化

石田あゆう（桃山学院大学社会学部教授）

1990年代に人気を博したサブカルチャーに「日独決戦」という架空の戦争を描いた一連の小説シリーズがある。架空戦記が愛読された背景には、経済大国として成功しながら、かつての敗戦国であるという日本人のナショナル・アイデンティティの問題がある。「絶対悪」であるヒトラーやナチズムを「敵」とし、日本人が打ち倒すことで得られる爽快な物語は、国内限定の「ナチカル（ナチズムのサブカル化）」ファンタジーとして楽しまれている。その前史としては、ドイツ参謀本部に学ぶビジネスマンの組織術、デスラー総統を敵とするアニメ『宇宙戦艦ヤマト』、各種マンガ等の大衆文化の蓄積が存在する。

こうした日本の平和主義における好戦的サブカルチャー受容において、リアルな戦争はむしろタブーである。中国や韓国、北朝鮮といったアジア諸国との戦いを描く「架空戦記」も存在するが、「日独決戦」ほどには大きなブームとはならなかった。確かに尖閣諸島や台湾に関連し、「日中戦うか」というイフ（もしもの歴史、反実仮想）の事態を想定する議論も生まれてはいるが、国際的な「戦争に関する世論調査」などにおいて、日本人のそもそも「自国のために戦う」という意欲は他国に比べてかなり低い数値となっている。

しかしながら現在が、新しい「戦前」だとする言説が登場している状況があり、それがどのような「戦争」を想定しているのかは定かでは無いままの雰囲気（世論 popular sentiments としての空気。明確な輿論 public opinion ではない。）だけがあることもまた確かだろう。

このようにかつてのナチカルを典型としてサブカルチャーなかの戦争消費と、アジアに対する日本人の戦争をめぐる意識には断絶がある。日本限定で受容されてきた「戦争の記憶」にかかわる文化装置も、アジアからの訪日も増加するなかで、修正を余儀なくされる場合があることもあわせて紹介する。

#### <参考文献>

- 赤上裕幸『「もしもあの時」の社会学 歴史にifがあったなら』筑摩選書、2018年  
石田あゆう「架空戦記」「マンガ&コミックス」、佐藤卓己編『ヒトラーの呪縛—日本ナチカル研究序説』下巻、中央文庫、2015年  
村瀬敬子「「二十四の瞳」と越境する<銃後の記憶>—小説・映画・テーマパークの表象をめぐって」高井昌史編『「反戦」と「好戦」のポピュラー・カルチャー—メディア・ジェンダー・ツーリズム』人文書院、2011年  
福間良明『「反戦」のメディア史——戦後日本における世論と輿論の拮抗』世界思想社、2006年

## 【第三報告要旨】

### 漫画にみられる中華表象と対中感情

上田貴子（近畿大学文芸学部教授）

日本人の対中感情は2023年現在、何度目かの低調を迎えている。戦後日本の中国に対する市民感情は国交回復以前であっても、現在のようなネガティブなものではなかった。毛里和子の整理に依拠すれば、1952年に日本は中華民国政府を相手とし、中華人民共和国政府を外交交渉の相手としなかったものの、「政経分離」の方針によって、経済的な関係をもちつづけた。1958年の長崎国旗事件以後は、中国側は「対日断交」姿勢をとったものの、日本国内には大陸との細いパイプは維持され続けた。日中両国ともにいずれは往来の回復のあることを望む人々の努力があり、それが実った1972年の日中国交回復は歓迎され1970年代の日中関係は「蜜月期」といわれる。80年代には歴史認識問題をめぐる中国からの異議申し立てにたいして日本国内からの反発がありはしたが、1989年の天安門事件においてさえ、日本は中国に対して経済制裁を科さなかった。この動きの水面下には草の根の日中関係があり、それをささえた中国への好感があったといえるだろう。ところが、日本人の対中感情は21世紀になって急落する。特に2005年2010年2012年には中国での大規模な反日デモは日本人の感情悪化の引き金となった。21世紀初頭の感情悪化は中国国内の対日感情の悪化と対であった。しかし、近年は中国から多くのインバウンド客が到来し、中国の対日感情は以前に比べて穏やかなものとなっているにもかかわらず、日本の対中感情が好転しない。20世紀後半の対中感情の根底に市民レベルで共有されていた中国に対する好感が現在は維持されていないのだろうか。

「蜜月期」には中国に対する好感が娯楽作品の中に多数見られた。特徴的なのは『三国志』や『西遊記』を素材とした中華文化を扱った「良質な」娯楽作品である。対中感情の形成にはこのような作品群の影響が皆無ではないと考える。本報告では「良質な」中華文化表象を扱った漫画作品を中心にとりあげ、そこに描かれる「良質さ」を歴史学の視点から検討を行う。

「良質さ」を特徴とする作品の一つに、体験をもとに書かれた作品群ある。特に1957年から1962年にかけて少女クラブに連載された『フィチンさん』は哈爾濱からの引揚げ経験のある上田としこによる作品であり、そこに描かれる哈爾濱の描写は哈爾濱で生活したことのある人間でなければ描けない要素がふんだんに盛り込まれている。さらに村上もとか『フィチン再見!』（2013-2017）は、この上田としこからのインタビューも踏まえた評伝ともいべき作品である。また竹宮恵子の『紅にほふ』（1994-1995）は親族の「満洲」経験をもとにした作品である。

また、日本の東洋史研究の成果を盛り込んで書かれた作品群も「良質さ」を維持している。横山光輝の『水滸伝』（1967-1971）以降、同『三国志』（1971-1987）から、現在連載中の原泰久『キングダム』（2006-）に至るまで、日本には中国の歴史書をもとに描かれた作品群が数多くある。

本考察ではこれらの「良質さ」を担保するものが何かを明らかにするとともに、現在の作品群の状況にも触れ、今後生まれてくる作品群の質の担保に歴史学が貢献できることにはなにかを考えたい。

## シンポジウムⅡ

### 日中間の学術交流と『日中社会学研究』の新たな30年に向けて

このシンポジウムでは、『日中社会学研究』第30号刊行および日中国交正常化50周年をうけて、今後の10年、20年、30年先を見据えて、日中間の学術交流と『日中社会学研究』の次の新たな30年を考えていくために、まずこれまでの学術交流等の状況を把握しておこうとするものです。(ただし、報告をお願いしていた中日社会学会の前会長で、日中の学術交流にご尽力いただいている羅紅光先生が、体調不良につき報告辞退を申し出てきました。とても残念ですが、体調の回復を祈りつつ、急遽、コメンテーターをお願いしていた中日社会学会の現会長の宋金文先生にご報告をお願いし、ご快諾をいただきました。)

そこで、今回は4人の日中社会学者の報告によって、このシンポジウムが開催されることになりました。ただし、『日中社会学研究』の第30号には、かつての会長であった根橋正一先生と陳立行先生が回顧の原稿を寄せております。根橋先生は1970年代から1990年代までの日中社会学会の生成期の様子を丹念に描いてくださっております。同様に、陳先生はさらに1995年以後の日中社会学会の様子も、日中関係をふまえて興味深く描いてくださっております。

したがって、今回のシンポジウムでは、以上を踏まえつつも、多少違った角度から、これまでの日中学術交流を振り返り、未来を展望する報告がなされるものと期待できます。日中社会学会や中日社会学会の立場からだけでなく、世界の社会学の中での展望や学会誌の編集長による展望なども論じられます。このシンポジウムを機に、さらに日中の学術交流を核とした交流が進展するために、いま何が求められているのかという点も一緒に考えたいと思います。

(西原和久)

#### 【第一報告要旨】

#### 21世紀の日中・中日社会学会の交流を振り返る

西原和久 日中社会学会会長

この報告では、主に21世紀に入ってからの日中／中日社会学会の動きを振り返ります。1980年に日中社会学会が立ち上がり、1993年に『日中社会学研究』が創刊されましたが、振り返ると2000年までの歩みは、つぎの21世紀の世界の中の日中学術交流の進展の重要な土台作りの時期だったといえるかもしれません。1996年の『中国の産業化と地域生活』(青井和夫編、東大出版会)や2000年の『現代中国の構造変動5 社会—国家との共棲関係』(菱田雅晴編、東大出版会)の2冊はその象徴例だと思われまふ。その土台となる跳躍台から次の21世紀の展望が開けてきます。焦点となるのは、2004年のIIS(International Institute of Sociology)の第36回世界会議の北京開催や中日社会学会の成立など、そしてその10年後の2014年のISA(International Sociological Association)の第18回世

界社会学会議の横浜大会と「China Day」の開催などですが、同時にその間に進捗していた日本社会学会における日中の社会学会の学術交流、および日本社会学会関係者による東アジア社会学者ネットワーク（EASN: East Asian Sociologists' Network⇒2019年に東アジア社会学会（East Asian Sociological Association）に発展）の活動なども大いに着目できます。そうした流れを概観して、21世紀の世界社会の中での日中／中日社会学の動きを検討します。そして、コロナ後の2024年以後の今後に向けて、日中の若い世代の社会学者が世界で活躍するために求められていることなどにも、この報告の中でぜひ触れたいと考えております。

## 【第二報告要旨】

### 新しい時代に相応しい総合的社会学知の創造を目指して —「日中社会学研究」創刊30周年に寄せて

宋金文 中日社会学会会長

「日中社会学研究」創刊30周年の記念を機に、過去の日中学术交流の歴史を回顧し、今後の学术交流の可能性と課題を議論するシンポを開催することは、とても期を得て、意味のある企画だと思う。

1、社会学は西洋から発生し、「実践科学」、「実証志向」の輸入学問として東アジアに伝来してからすでに久しい。その間、アジア諸国の多くの社会学者は自国の社会変動、社会問題を西洋の理論を吸収しながら、それぞれの国において、ある歴史的時点においてどんなことが生じ、どんな問題があり、どんな方法で解決しようとしたのかという「事実」「実践」をめぐって深く広く考察してきたのは間違いない事実であり、かつ新しい事実の発見や新しい理論も提示してきた。と同時にトランスナショナルの研究も多く見られるようになった。日中社会学者による交流もそうした流れの一環をなしてきたといえよう。

2、それぞれの国の社会学者、研究者の地味な研究を通して得られた知見は、出版物、メディア、共同研究、共同調査、シンポジウムなどのさまざまな形でほかの国に紹介され、また、ある程度受容され、共有知となった面はある。一方、それはいかにスピーディかつ適切に紹介され、共有されていたのかといえば、個別のケースは別として、全体としてはタイムラグがあったり、あるいは全まったく伝わっていなかったりする場合が多いのではないかと。

ここで、中国における日本研究、とくに中日社会学メンバーの研究の様子を簡単に紹介しながら、最近の新しい社会激変に伴う時代の要請において、とくに横の連携、ネットワーク化による社会学知の深化の必要性を述べる。

3、最後に、社会学知の創造と応用の課題や難点を指摘しながら、それを乗り越える知的交流を図ることの意味を考える。

## 【第三報告要旨】

### 日中社会学会を通じた学術交流について

首藤明和 日中社会学会元会長

今世紀、中国国内の社会学の国際化について、その内容や方向性に大きな影響を与えた出来事に、IIS 国際社会学機構 (Institut International de Sociologie) の第 36 回世界社会学大会開催が挙げられる。

この北京大会は SARS のために延期となり、当初 2003 年 7 月 7-11 日開催予定が、ちょうどその 1 年後の開催となった。当時確かに開催を危ぶむ声が国内外の関係者から聞かれたものの、中国社会科学院社会学研究所が中心となって準備が進められ、結果的に、世界 50 あまりの国・地域から 1000 名以上の社会学者が参集するなか、天安門広場に面する人民大会堂で盛大に開催され、IIS の歴史のなかでも特筆すべき大きな成果をあげて閉会した。

IIS は 100 年以上の歴史をもち、現存する〈地球規模〉の社会学会としては最古のものに数えられる。ヴェーバーやジンメルもその会員であった。ISA 世界社会学会がナショナル・アソシエーションの連合体であるのに対して、IIS は個人ベースの組織である。このことが、中国社会学界が世界に門戸を開くための正統かつ正当な理由を提供し、動機となったように思う。実際、中国側と IIS 側の事前の交渉では、本件やそのことに関連した政治的・経済的な問題が多く議論され、報告者自身もまた、IIS や中国の関係者から意見を求められることが少なからずあった。

周知のように日中社会学会は 1979 年の発足以来、中国社会科学院社会学研究所とのあいだで、学術・文化の交流活動を精力的におこなってきた。その流れのなかに、この IIS 世界社会学大会北京開催が位置づけられることは疑いようがない。

本報告では、日中社会学会による IIS 世界社会学大会への取り組みを振り返り、その上で、(余力があれば) ポスト IIS における中国社会学界の国際化について私見を述べてみたい。具体的には、(1) 国際社会学機構 (IIS) の概要、(2) 日中社会学会員に向けた第 36 回 IIS 世界社会学大会開催のお知らせ、(3) 日中社会学会としての申請企画など学会としての取り組み、(4) (余力があれば) その後の中国社会学界の動向などについて報告する。

## 【第四報告】

### 日中社会学研究における学術交流

江口伸吾 『日中社会学研究』前編集長

『日中社会学研究』は、1993 年に、改革開放というグローバル化を背景とした中国の時代的な転換の過程で、社会学の方法論に基づいて中国社会の諸変化を実証的に検証することを目的にして創刊された。また、その当初から、本誌の根幹を成す要素として、陸学芸などをはじめとする中国の社会学者との学術交流があげられ、多くの貴重な研究が掲載された。さらには、四半世紀余りにわたる本誌の刊行の過程で、日本で社会学研究を志す多くの留学生が参画したことにより、本誌の学術的な意義も深まった。これらは、本誌のそもそも



の成り立ちにおいて、国際的な学术交流が本質的な役割を果たしていたことを示す。

他方、現在、本誌の分析対象となる中国、そして中国をめぐる国際環境は、新たな時代的な転換の過程にあり、本誌の重要な要素となる学术交流にも影響を及ぼす。すなわち、21世紀に入って中国の国際社会における存在感が増す中、国際秩序の再編をめぐる米中の対立が激化したとともに、国内的にも党・国家の集権化の動向が重なり、学术交流の面においてもさまざまな制約が生まれつつあると捉えられる。たとえば、米中対立の激化にみられる国際環境の変化は、改革開放以降に顕著に形成されてきた国境を越えるグローバル社会を分断するリスクをもたらした。また近年注目を集めるようになった中国におけるデジタル社会への先駆的な移行の過程は人々の生活を便利なものにした一方、社会管理システムも精緻化させ、人々の生活が繰り広げられる社会的領域において政治化を浸透させつつある。これらの複合的な変化の結果、社会学研究そのものが政治化されるリスクを増大させ、またそれに伴ってもたらされる学术交流への負の影響も懸念されるようになった。

このように中国の国内外において、社会的領域の政治化の流れが強まる中、『日中社会学研究』における今後の学术交流に何が求められるのであろうか。本報告では、『日中社会学研究』に掲載された諸論稿を学术交流という視点から捉え直し、その特徴や変遷の過程を把握するとともに、ポスト改革開放が問われる時代の転換点において、『日中社会学研究』における学术交流の課題や可能性を検討する。